

# 江戸時代のお墓参り

もんぜんかみ やしき  
～門前上屋敷遺跡と門前第2遺跡～



門前上屋敷遺跡の墓石と石積みの壇  
この墓石は最も古い享保年間のもの

**お墓参りの歴史**  
夏本番となり、お盆も目前に迫ってきました。お盆に行っていた昔ながらのいろいろなお祭りごとはだいたいぶ下火になってしまいました。お墓参りは今でも多くの家で続けていることと思えます。今私たちはこのようにお盆やお彼岸などにお墓参り

をしますが、こうした風習は実はそんなに古いものではなくて江戸時代の中ごろ(18世紀)になって始まったと考えられています。門前上屋敷遺跡ではそれを裏付ける発見がありました。**墓石発見**  
昨年度調査した鎮守山のふもとあたりで表土を取り除いて

いたところ、石積みの壇が姿を現し、その上から墓石が六つほど見つかりました。墓石はいずれも平たく丸い形の自然石に戒名と没年月日が彫りこまれています。最も古いものは夫婦の墓石で、享保5年(1720年)と享保14年(1729年)の没年が刻まれています。享保年間というのは墓石を立てる風習が全国的に一般庶民にも広まり始めた時期です。ほかの墓石は明和年間から天明年間にかけての没年が刻まれているので、18世紀後半のものと分かります。これはちょうど墓石が庶民に十分に普及したころにあたります。

これより古い墓石は遺跡からも見つかっていませんし、周辺の墓地にもほとんど見当たりません。ほかの地域の例を見ても、18世紀になるまでは墓地に墓石を立てて墓参りをするということとを庶民はあまりしていなかったようなのです。**ウメバカとマイリバカ**  
お墓参りをしなかったのは、当時の人々は遺体をけがれたものとしておそれていたからだといわれていました。そうした考えの強い時代に、お墓に墓石を立ててお参りをするという風習が広まり始めても、遺体へのおそれから埋葬地には墓石を立てない村が出てきました。こうした村では「マイリバカ」といって、遺体の埋まっていない墓石だけの墓地をつくり、「ウメバカ」と呼ぶ埋葬地とは別にしていました。お墓参りをするのは基本的にはマイリバカのほうだったようです。そうすればお参りするときに遺体のけがれを受けることはないと考えたわけです。こうしたお墓の営み方を「両墓制」と呼びます。江戸時代とはいくらか形を変えています。今でも両墓制を行っている地域は全国にたくさん残っていて、大山町内にもこうした墓地がいくつかあります。

実は、上屋敷のすぐ西の丘陵上の門前第2遺跡では昨年度の調査でウメバカが見つかったのです。ここでは江戸時代の墓穴がたくさん見つかったのですが、墓石はひとつもなかったのです。どこか別の場所に墓石の立てられたマイリバカがあるに違いないと考えていました。今回門前上屋敷遺跡でみつかった墓石は、まさにそのマイリバカなのではないかと思うのです。**お墓から死生観を探る**  
門前上屋敷遺跡の調査が進めばさらに新しい発見があると思えます。門前第2遺跡から出土した人骨や遺物を詳しく調べているところです。これらの成果が出てくれば、江戸時代の農村での葬式や死者の供養の様子が明らかになってくるでしょう。そして、江戸時代の庶民が死をどのように受け止め、感じていたか、そうしたことも垣間見えてくるのではないかと思います。

鳥取県埋蔵文化財センター  
名和調査事務所  
〒689-3205  
西伯郡大山町西坪字中松堀 179-5  
電話 0859-54-2671